モーツァルト巡礼ーその 21

K.518　水谷康男

今号では、K593 から始めます。

K593 は、**弦楽五重奏曲　ニ長調** です。モーツァルトの自筆目録には、1790 年 12 月に作曲した作品として記録されています。第 1 楽章は、ラルゲットというゆったりとした会話が続いて、アレグロに入ってとても集中力を要求し、しかも流れるような充実した旋律が続き、久しぶりに巡礼に戻った私に、どうだ！といわんばかりの傑作です。今聴いているのは、全曲集の中の CD で、全く未知のオルランド弦楽四重奏団に二番目のヴィオラとして今井信子が加わった 1989 年の録音ですが、音もよく鮮烈な音楽づくりにとても魅せられます。5 つの声部がそれぞれ独立して動き、「誰が主役なのか分からないほど、全員が重要」という状態になり、これが K.593 の大きな魅力です。最後に、ラルゲットとアレグロが再現されて第 1 楽章が終わります。

第 2 楽章は、アダージョで、第 1 楽章の緊張感から一転して、非常に深い静けさがあります。5 つの声部が非常に精緻に絡み合います。特に、「モーツァルトの美しさ」と「モーツァルトの知性」が同時に感じられる楽章です。旋律を一人が歌い、それを別の楽器が受け継ぐ。さらに別の楽器がそれに応答する。まるで 5 人の室内楽奏者が、言葉を使わずに会話しているようです。

第 3 楽章は、メヌエット:アレグレットートリオ　ここで雰囲気が変わります。非常に堂々としたメヌエットです。ニ長調の明るさもあり、ある意味ではハイドンを思わせる古典的な風格があります。ただし、よく聴くと、単純な舞曲ではありません。5 つの楽器が対位法的に絡み合い、終盤にはカノン的な処理も登場します。

第 4 楽章は、アレグロですが、表面的には明るく、軽快で、非常にモーツァルトらしい。単に突っ走るだけではなく、中身はかなり高度な対位法でできています。テーマが次々と別の楽器に受け渡され、5 つの声部が複雑に絡み、壮大な最期を迎えます。

今回は、無名な Orlando 弦楽四重奏団に Va の今井信子が加わった 1989 年の録音でしたが、これが音質もよく、素晴らしい推進力のある演奏で、すっかり気に入りました。

K594 は、**自動オルガンのための幻想曲　ヘ短調**　で、1790 年 12 月ウィーンで、ダイム伯爵のために書かれた曲ですが、4 種のピアノのための編曲や、自動オルガンではなく、本来のオルガン曲としても演奏される佳曲です。

K595 は、最後の**ピアノ協奏曲　第 27 番　変ロ長調**　です。自筆譜には 1791 年 1 月 5 日の日付があります。ところが譜に使われた紙の分析から、作品のかなりの部分は 1788 年頃に書かれていた可能性があります。1788 年頃に着手され、いったん中断され、1791 年に完成したのではないか　という説が有力です。1791 年 3 月 4 日、ウィーンのヤーン邸ホールで、モーツァルト自身が独奏して演奏されたと考えられています。これがモーツァルトの最後の協奏曲独奏者としての公演にもなりました。

第 1 楽章 Allegro　静かな明るさ 変ロ長調、4/4 拍子「静かに人生を振り返っている」ような音楽です。

第 2 楽章 Larghetto　この曲の核心 変ホ長調、2/2 拍子 ピアノが歌い始めると、オーケストラがそれに答える。そしてまたピアノが語る。つまり、ピアノとオーケストラが会話をしている。一人ひとりの声が互いに聴き合っている。ここに晩年のモーツァルトの室内楽的な美しさがあります。

第 3 楽章 Allegro ― 意外なほど明るい 6/8 拍子の明るい Allegro この協奏曲の完成直後に、《春へのあこがれ(Sehnsucht nach dem Frühlinge)》K.596 という歌曲を書いています。実は、その歌曲の旋律と、この協奏曲第 3 楽章の主題には深い関係があります。つまり最後の楽章は、「死に向かって消えていく音楽」ではなく、春を待つような音楽なのです。

K596、K597、K598 とつづく 3 曲は、最後の年 1791 年に、この前の傑作ピアノ協奏曲 K595 の数日後に以下のように作曲されています。

K.	曲名	調性	拍子	性格
K.596	《春への憧れ》	ヘ長調	6/8	明るく、春を待ち望む
K.597	《春の初めに》	変ホ長調	2/4	やや静かで穏やか
K.598	《子供の遊び》	イ長調	3/8	活発で無邪気

いずれも独唱＋ピアノ(クラヴィーア)のための有節歌曲です。しかも、3 曲とも驚くほど簡素です。

K.596《春への憧れ》は、この曲は、おそらく 3 曲の中で圧倒的に有名です。この旋律は K.595 の第 3 楽章から来ていることもあって、大変親しみやすい曲です。

K.597《春の初めに》 こちらは K.596 よりずっと控えめです。K.596 が、「早く春にならないかな！」という子供の期待だとすれば、K.597 は、「春が少しずつやって来た……」という感じ。です。

K.598《子供の遊び》 これは一転して、「子供たちが遊んでいる！」という音楽です。

K593 から K598 まで順番に聴いていくと、音楽がどんどん小さく、簡潔になっていくにもかかわらず、、音楽の深さは少しも小さくならないことに、感激するばかりです。。

K599 は、**6 つのメヌエット** です。Fl・Ob・Fg・Hr・Tp 各 2 本と Timp、Vn2 部、Vc・Cb という編成で、1791 年 1 月に作曲されました。さらに **K601** の **4 つのメヌエット** と **K604** の **2 つのメヌエット** とあわせて、12 のメヌエット(K599,601,604)としてひとくくりにされることもあります。 一覧にしてみると、

K 番号	曲名	調性	性格
599-1	六つのメヌエット 第 1 曲	ハ長調	
599-2	六つのメヌエット 第 2 曲	ト長調	
599-3	六つのメヌエット 第 3 曲	変ホ長調	優雅さ
599-4	六つのメヌエット 第 4 曲	変ロ長調	
599-5	六つのメヌエット 第 5 曲	ヘ長調	愛らしさ
599-6	六つのメヌエット 第 6 曲	ニ長調	祝祭性
601-1	四つのメヌエット 第 1 曲	イ長調	
601-2	四つのメヌエット 第 2 曲	ハ長調	ユーモア
601-3	四つのメヌエット 第 3 曲	ト長調	
601-4	四つのメヌエット 第 4 曲	ニ長調	
604-1	二つのメヌエット 第 1 曲	変ロ長調	
604-2	二つのメヌエット 第 2 曲	変ホ長調	最晩年の余韻

いずれも 2 分程度の小品ですが、音楽が生き生きとして、こんな曲でも、モーツァルトの天才性が見事に現れています。

K600 は、六つのドイツ舞曲、K602 は、四つのドイツ舞曲、K605 は、二つの(三つの※)ドイツ舞曲 と続きます。Fl・Ob・Fg・Hr・Tp 各 2 本と Timp、Vn2 部、Vc・Cb という編成で、1791 年 1 月に作曲されました。

K600-1	六つのドイツ舞曲 第 1 曲	ハ長調
K600-2	六つのドイツ舞曲 第 2 曲	ヘ長調
K600-3	六つのドイツ舞曲 第 3 曲	変ロ長調
K600-4	六つのドイツ舞曲 第 4 曲	変ホ長調
K600-5	六つのドイツ舞曲 第 5 曲	ト長調
K600-6	六つのドイツ舞曲 第 6 曲	ニ長調
K602-1	四つのドイツ舞曲 第 1 曲	変ロ長調
K602-2	四つのドイツ舞曲 第 2 曲	ヘ長調
K602-3	四つのドイツ舞曲 第 3 曲	ハ長調
K602-4	四つのドイツ舞曲 第 4 曲	イ長調

K605-1　　二つのドイツ舞曲　第 1 曲　ニ長調
K605-2　　二つのドイツ舞曲　第 2 曲　ト長調
K605-3　　三つのドイツ舞曲　第 3 曲　ハ長調※
※モーツァルト自身の作品目録には「二つのドイツ舞曲」となっていますが、古い写本には第 3 の曲（有名な「そり遊び」）が入っています。

K603 は、**二つのコントルダンス**で、第 1 曲は、ニ長調、第 2 曲は変ロ長調 のそれぞれ 2 分程の宮廷舞踏会の作品で 1791 年 2 月 5 日に作曲されました。 K604,605 は、既述

K606 は、六つのレントレリシュ（レントラー）で、K607 のコントルダンス と共にウィーンで、1791 年 2 月に作曲されました。フルオーケストラのために書かれたと思われますが、今は ヴァイオリン二部と バス しか残っていません。ここの 6 つは、続けて演奏される六つのセクション、すべて変ロ長調です。

K607 のコントルダンスは、1786 年にウィーンで初演された、アンフォッシ（1727～1797）のオペラブッファ「奥方の勝利」から引用された陽気な曲です。

K608 は、自動オルガンのための アレグロとアンダンテ ヘ短調 です。1791 年 3 月に完成した、K594 と同じくダイム伯爵の注文により作曲された、自動オルガンのための 2 作目に当たります。第 1 部 アレグロ、第 2 部 アンダンテ、第 3 部 アレグロの導入部とフーガ の 3 部よりなり、演奏時間 14 分です。

K609 は、五つのコントルダンス で、1791 年ウィーンでの作とみなされています。フルートと太鼓にヴァイオリン 2 部、チェロ・バスの編成で、各曲は以下の通りです。演奏時間 6 分程の小品です。

K609-1	五つのコントルダンス 第 1 曲	ハ長調
K609-2	五つのコントルダンス 第 2 曲	変ホ長調
K609-3	五つのコントルダンス 第 3 曲	ニ長調
K609-4	五つのコントルダンス 第 4 曲	ハ長調
K609-5	五つのコントルダンス 第 5 曲	ト長調

K610 は、コントルダンス ト長調 で、1791 年 3 月ウィーンで作曲されました。Fl・Hr 各 2 本、ヴァイオリン 2 部、チェロ・バスの編成で、1 分余りの小品です。

K611 は、ドイツ舞曲とトリオ ハ長調 で、Fl・Ob・Fg・Hr・Tp 各 2 本、Timp、鈴、ヴァイオリン 2 部、チェロ・バスの編成で、1791 年 2 月に作曲され、演奏時間 6 分程の佳曲です。

K612 は、バスのためのアリア「この美しい手に」で、1791 年 3 月 8 日、ウィーンで完成しました。 Fl 1 本、Ob・Fg・Hr 各 2 本、Timp、ヴァイオリン 2 部、ヴィオラ 2 部、チェロ・バスの編成で、バスによって歌われます。初演時のオーケストラメンバーにコントラバスの名手が入っていたためか、コントラバスのオブリガードがついています。まず、この曲の一番面白いところで、普通のバス・アリアなら、バス歌手＋オーケストラなのですが、K.612 ではそこに何と、独奏コントラバス が加わります。 しかも単なる伴奏ではありません。コントラバスが歌手と対等な「もう一人のソリスト」として活躍します。 モーツァルト自身の作品目録にも、「バス・アリア、コントラバスのオブリガート付き、ゲール氏とピシュルベルガー氏のため」という趣旨の記載があります。2 人のために書かれた「名人芸のデュエット」バス歌手はフランツ・クサーヴァー・ゲルル。
そしてコントラバスはフリードリヒ・ピシュルベルガーです。つまり K.612 は、「誰でも歌えるバス・アリア」ではなく、モーツァルトが二人の名人を想定して書いた作品と考えると、非常に面白く聴けます。

K613 は、シャックの「女は素敵なもの」の主題による八つの変奏曲 で、1791 年 3 月ウィーンにて作曲された、モーツァルト最後のピアノ独奏の変奏曲です。原曲は、エマヌエル・シカネーダーの劇場世界から生まれた歌曲で、《Der dumme Gärtner（愚かな庭師）》というジングシュピールで使われた旋律です。音楽は一般にベネディクト・シャックの作とされています。一見すると家庭用のピアノ変奏曲ですが、実は《魔笛》誕生直前のウィーンの大衆劇場文化とつながっているのです。ヘ長調・3/4 拍子・Moderato のテーマはかなり長く、長いテーマをしっかり聴かせたうえで、徐々に変奏の世界へ入っていきます。

明るいテーマ→ 優雅な変奏→ 短調の陰影→ 歌謡的な第 7 変奏→ 活発な第 8 変奏→ 意外性のある終結 という、かなり大きなドラマを持っています。

この曲を聴くとき、次の二面性を意識すると面白いと思います。

表の顔

「ウィーンの人気作曲家モーツァルト」

誰でも知っている親しみやすい旋律を使い、家庭で楽しめるピアノ曲に仕立てる。

もう一つの顔

「1791 年のモーツァルト」

短調、半音階、和声の陰影、突然の転調、そして歌劇的な表情。

この二つが同居しています。だから K.613 は、単なる「可愛らしいピアノ変奏曲」として聴いてしまうと、少しもったいないのです。

K614 は、弦楽五重奏曲 変ホ長調で、1791 年 4 月 12 日ウィーンで完成した、モーツァルト最後の弦楽五重奏曲です。作曲されたのは、モーツァルトの死の約 8 か月前、しかも直前には、

- K.612 バス・アリア《この美しい手に》
- K.613 《8 つの変奏曲》
- K.614 弦楽五重奏曲 変ホ長調

と続きます。つまり、K612、K.613 から、そのまま K.614 へ進むと、1791 年春のモーツァルトを連続して感じることができるのです。K.614 を一言で表すなら、「最晩年なのに、驚くほど生き生きとしている音楽」でしょうか？K.613 には、明るい歌曲風の親しみやすさの中に、短調、半音階、和声の陰影などが時折現れました。ところが K.614 では、それが弦楽五重奏という、より高度な室内楽の世界に昇華されています。

しかも「悲しい最晩年」という感じがほとんどありません。むしろ、知的な遊び心＋歌うような美しさ＋高度な対位法＋人間的なユーモアではないでしょうか？

第 1 楽章 Allegro di molto 冒頭から、とても活発です。「Allegro」ではなく、Allegro di molto ——「非常に速く」。そしてこの楽章の面白さは、単なる華やかさではありません。五つの弦楽器が、互いに旋律を受け渡していきます。

第 2 楽章 Andante ここで突然、時間がゆっくりになります。「歌うモーツァルト」が現れます。しかし、ここでも単なる美しい旋律ではなく、旋律の下で、他の 4 つの楽器が絶えず動いています。ここが K.614 を聴く醍醐味です。

第 3 楽章 Menuetto モーツァルトのメヌエットというと、「優雅な宮廷舞曲」 を想像しがちですが、K.614 はもっと茶目っ気があります。リズムのアクセントがずれたり、音型が突然現れたりして、「おや？」と思わせる瞬間が何度もあります。ヴィオラ 2 本を含む 5 声部が、ヴィオラが単なる中間音域の「埋め合わせ」ではなく、モーツァルトの冗談を仕掛ける役を担っています。

第 4 楽章 Allegro そして、最後が圧巻です。この終楽章は、モーツァルトの室内楽における「遊び」の極致の一つだと思います。短い音型が次々と受け渡され、ヴァイオリン → ヴィオラ → チェロ → またヴァイオリン……と、まるで 5 人が音楽的な会話を楽しんでいるようです。「誰が主役なのか分からない」という状態になります。それこそが五重奏曲の魅力です。

以降、次号に続きます。 ※なお、前々号より ChatGPT の力も利用していることをお断りいたします。